

---

# 大人の別れ方

ウメ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大人の別れ方

### 【Nコード】

N0265C

### 【作者名】

ウメ子

### 【あらすじ】

大好きな彼との別れ…大人としてどう別れるのが良いのだろうか。

**(前書き)**

まだまだ未熟ですが最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

彼と私の出会いは、家に帰ろうと歩いていた時に、彼が話し掛けてきたコトから始まった。

少し話をして、感じの良かった彼に番号を聞かれ、彼氏もないし良いかなと思い、それからすぐに付き合うようになった。

彼は私より2歳年下で、私は今まで年上としか付き合ったコトがなかったから、彼のコトを新鮮に感じて楽しかった。

そして、日に日に彼を好きになる自分を感じていた。

そんなある日：彼から連絡がなくて、私から連絡してもとってもらえないコトが数日続いた。

今まで彼から連絡がないコトなどなかったのに…。

すごく嫌な予感がした。

なぜ、こういう時には女の勘が働いてしまうのか…何となく、もう私と彼は終わりなんだって分かった。

でも、理由も分からないまま終わるのは嫌だったから、最後の望みを託して、メールをしようか電話にしようか悩んでいたら、彼専用の着信が部屋に鳴り響いた。

「…メールが着てる」

画面を見つめながら、いつそ見ないまま削除してしまおうかなんて考えた。

何を馬鹿なコトをと思い、おもわず苦笑いになった。

ゆっくりメールの画面を開くと、彼からシンプルで分かりやすいメールが入っていた。

『他に好きな子ができたから別れてほしい』

やっぱり…彼から言われるまで気付かないフリをしていた。  
でも、もうそんな必要もない。  
彼にはつきり言われてしまったから…。  
仕方ないな、そう思うと小さく笑ってしまった。  
でも…メールで終わらせるのは腹が立つな。  
彼に電話をしてみると留守電につながった。  
電話に出る気はないみたいだ。  
勝手に終わらせたつもりなのだろうか？

アタシは彼に対する怒りから、急いで着替えて用意をすると彼の家に向かった。  
彼の家に着くまでの間、私は彼を一発殴らないと気が済まないと考えていた。  
あんなメールだけで、私たちの関係が簡単に終わると思われていたコトが許せなかった。

彼の家に着くと、彼は留守だった。  
どうしようか悩んでいたら彼が帰ってきた。  
彼は少し驚いたようだったが、私をじっと見ていた。  
彼に久しぶりに逢えて、怒りが少し消えた。  
あんなに怒っていたのに、彼を見て嬉しくなった自分に少しとまどった。

私はまだ彼のことが好きなんだ。  
そんなコトを考えながら、私も彼から視線をそらさないようにして彼に言った。

「話があるから、どこか静かなトコない？」  
彼は

「分かった」

と言うと公園のベンチへ向かい、二人で並んで腰掛けた。

私は絶対に泣いたり取り乱したりしないと決めて、彼に笑顔で普段の口調で聞いた。

「メール見たよ。好きな子がきたんだね… 同い年の子なの？」

「いや… 年下の子」

年下か… って何聞いてるんだろ。いまさら詮索しても仕方がない。私が聞きたいのはそんなコトじゃない。

「そっか… それなら仕方ないね。短い間だったけど楽しかった。3カ月だったけど、私はすごく幸せだった…」

あっどうしよう… 泣きそうになってきた。

泣くなっここで泣いたら笑顔でサヨナラができない。

どうして私は笑顔でサヨナラをしようとしてるんだろう。

私は彼を殴るつもりだったのに。最初の決意はどこに行ってしまったのか… 私はなぜ言いたいことを言わないのだろう。

いや、言えないのかもしれない。

いまさら彼に自分の気持ちを言うのが恐いのかもかもしれない。

私は、昔のように自分を曝け出すことが出来ない大人になっていたコトに気付いた。

本音と違うコトを、私はまた話し出す。

「何となく、別れるだろうなって思ってたんだ。私って悪い勘は当たるから… 何でかな。他に好きな人が出来たら仕方ないもんね」  
もう声が震えてるし、涙もとまらない。

このままだと泣きついてしまいそうだ… 本当は別れたくない。でも彼のなかに私はもういないから認めないといけない。

大人らしく別れる方法ってあるのかな？

もしあるなら、今すぐ知りたい… ちゃんとサヨナラできる勇気がほしい。

しばらくの沈黙が二人の間に流れていた。

彼が何を思っているのかも分からないし、彼も私が何を思っているかなんて分からないんだろうな。

そんなコトをぼんやり考えてたら、ふいに彼が話し出した。

「電話とらなくてごめん。返信もしてなかったし…電話をとる勇氣がなかった。どう話せばいいか分からなかったから」

それであるメールだったのか。

私を振るのに勇氣がいるのだろうか？

そう思いながら私はまた言う。

「そっか。…まあ私のコトもう好きじゃないから仕方ないね」と、思っているコトとは違うコトを言った。

これが大人らしい別れ方なのだろうか。

私には分からない…納得して受け入れるのが大人なのだろうか。仕方がないと思うしかないのだろうか。

本当に言いたいコトは隠したままで…。

「分からない…。でも、いま好きな子より好きにはなれない」  
やっぱり彼のなかに私はいない。

もう終わらせよう…今サヨナラを言わないと言える自信がない。

「分かった…もうサヨナラだね。あなたのコトが大好きでした、本当に大好きでした。ありがとう…サヨナラ」

私はそう言うのと彼に背を向けて歩いていった。

これは私のプライド…彼に最後に見せた大人の私。

涙で視界がぼやけて歩きにくかったけど、何とか歩けた。

「付き合ってた楽しかった。本当に好きだった…ありがとう」

彼が私の背中に向かって少し大きな声で言った。

どうして今そんなコトを言うの？

私は立ち止まりそうになった。プライドなんか捨てて彼のもとに行

って、別れたくないと思いきつきたかった。

ここで彼のもとに行かずに去るのが大人の別れ方だとしたら、私は大人になりたくないと思った。

それでも私は、泣き声が彼に聞こえてしまわないように、彼のほうを振り向かないように必死で堪えながら歩き続けた。

彼から見えないところまで歩くと、私はもう我慢できなかった。

周囲を気にすることなく、声を出して泣き続けた。しばらく泣いて落ち着くと、私はゆっくりとした足取りで自分の家へ向かった。

たくさん泣いたせいか、だいぶ落ち着いていた。

歩きながら彼との思い出を思い出していた。

自然と笑みがこぼれて、私は本当に幸せだったんだ、彼のことを本気で好きだったんだと思えた。

こんなに人を好きになれたのは初めてかもしれない、今になって気付いた。

これから先、誰かを好きになつたとしても彼のこととは絶対に忘れな  
いなと考えながら、私は彼との思い出を胸に、前を向いて歩きだした。

END



(後書き)

大人の別れ方ってどんな別れ方なのか考えて書いたモノです。 初  
投稿の作品なので、感想をいただけたら励みになります。 よろしく  
お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0265c/>

---

大人の別れ方

2010年10月28日05時51分発行